

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名

楊 柳

論 文 題 目

長崎唐通事集団の研究

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	羽賀 祥二
委員	名古屋大学教授	池内 敏
委員	名古屋大学教授	古尾谷知浩
委員	名古屋大学教授	齋藤 夏来
委員	名古屋大学教授	井上 進

論文審査の結果の要旨

【本論文の要旨】

本論文は、長崎奉行の管轄下に組織された地役人であり、来航する中国人商人との間を仲介し、さまざまな業務を担った長崎唐通事に関する研究である。唐通事は、明から清への王朝交代期に日本へ亡命した中国人とその子孫であり、長崎に定住した後に、その言語能力を生かして、唐船貿易の管理、渡航中国人（唐人社会）の取締り、中国を中心とした海外情報の収集、文書の作成、さらに中国文化の受容などの多方面において重要な役割を果たした存在であった。慶長9（1604）年に設置された長崎唐通事は、17世紀中期頃には大通事・小通事・稽古通事の3職階ができ、その後集団内部に変化を見せながら、明治維新まで存続していった。就任者の延べ人数は1000人を超えたとされるが、本論が検討の対象としたのは、大通事・小通事・稽古通事の三職がある「本通事」である。

これまでの長崎唐通事に関する研究は、貿易史・在日華僑史・文化交流史・中国語教育史などの領域で多くの研究がなされてきた。唐通事自体に関しても、唐通事の職制と役割、唐通事の家系と著名な人物、唐通事の言語習得や語学力などが検討されている。しかし、唐通事という集団やその活動については概括的に検討されているものの、集団の実態とその変遷、業務ごとの担当者とそれぞれの役割、彼らが担った多様な活動などについては、究明されていない課題も多い。本論文はこれらの未開拓のまま残された課題を解明することを目標としている。

本論文では、長崎唐通事集団に関する基礎的な作業として、『訳司統譜』、『唐通事家系論考』、『分限帳』（諸役人帳・地役人附）など基本史料の丁寧な解読作業を通じて実証的に解明し、その集団の成立から終結に至る過程をいくつかの時期に分け、それぞれの時期における集団内の構造、貿易や唐船風説書に関する業務、唐人社会との関係などを検討しつつ、さらに明治維新前後に現れた唐通事集団の新たな動向について、幅広く考察を加えた。本論文は、序章及び本論6章、そして終章から構成される。

序章では、唐通事研究の現状と問題点を指摘するとともに、本論文の課題と利用する史料について述べる。第1章では、唐通事集団として組織化される過程とその変遷、唐話会などを通じた後継者育成について考察を行う。第2章では、唐通事の「名門」家の出自と出世、及び19世紀に入って進出してくる「新名門」家の動向とその影響力を解明する。

第3章では、唐通事集団の唐船貿易への管理に関して信牌交付の業務、第4章では、唐通事集団と長崎在住の唐人との関係と時代的な変化を検討した。第5章では、唐通事の唐船風説書の作成への関与について、第6章では、長崎唐通事集団の昌平坂学問所出役の交代状況を整理・考察するとともに、明治維新前後の唐通事集団の動向を長崎行政機関の変遷に沿って検討した。そして終章では、本論文の内容を要約するとともに、残された課題を指摘した。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文の作成過程で論者が最初に関心を抱いたのは、第5章で論じた唐風説書の作成とその内容に関する問題だった。論者は、その後この問題の検討を進める中で、唐風説書の作成にも携わった長崎唐通事の集団自体に問題関心を移し、近世全体を見通して通史的に唐通事集団の内部構造やその業務内容の変化を追究し、また長崎に存在した唐人社会との関係などの問題も視野に入れつつ、唐通事集団の全体像を再構成することを目指して、研究を進めた。

論者は、長崎県立図書館・九州大学・早稲田大学・東大史料編纂所などにおいて、唐通事関連の史料を博搜し、収集した諸史料を子細に分析して、その成果を本論文として結実させた。論者の研究に対する意欲と熱心な姿勢は本論文の随所に現れている。

本論文の意義は第1に、長崎唐通事集団の特徴、すなわち家系・出自や集団の規模、昇進ルート、そして語学習得や後継者養成のプロセスなどについて基本的な事実を踏まえながら、さらにそれらが時代の変化の中でいかに変化していったのかを解明しようとしたことにある。

本論文の意義は第2に、唐通事集団が担った貿易管理、唐船風説書の作成を通じた海外情報の収集などの業務、唐通事集団と在長崎唐人社会との関係といった、多くの問題に目配りしつつ、唐通事が日中関係に果たした役割を総合的に検討しようとした点にある。そして、19世紀に入って唐通事集団に出現した変化を「新名門」家の形成という視点から捉え、『訳司統譜』、『唐通事家系論考』、『分限帳』などの分析によって、旧来の「名門」に匹敵する新しい唐通事家の登場を明らかにした点に本論文の第3の意義がある。

さらに19世紀における唐通事集団の変化の側面として、開港後の唐通事の長崎以外での活動、英語の習得、維新政府への登用など解明しつつ、唐通事集団の大きな変容と解体過程に迫ろうとしたことを、本論文の意義として付け加えることができる。

しかし、本論文にはいくつかの問題点が指摘される。本論文を構成する各章の連関性、論旨の展開に不明な点があり、それが論としての主張に弱さに繋がって、論文としての完成度にやや難があること、また個別事象の説明や論証が不十分で、表面的な史料解釈にとどまっている箇所も散見される点である。論者は、長崎唐通事の通史的、全体的な解明を目指そうとすることに関心を傾けすぎた結果、唐通事集団の性格をいかに捉え、どのように理解するかという問題意識に弱さが見られる点は惜しまれる。また明治維新前後における唐通事集団の役割の変化、その解体過程に視野を広げ、論じた点は評価に値するものの、幕府や維新政府の政策を十分に考慮した叙述とすべくさらに検討すべきだろう。しかし、これら不十分さはあるが、論者のより丁寧な分析と真摯な研究姿勢によって、今後克服されていくことが期待できる。よって審査委員一同、本論文が博士（歴史学）の学位を授与されるにふさわしいものと判定した。